



健常者と障碍者の 真ん中にある音楽

1967年3月17日、私は「先天性股関節脱臼」という障碍を持って生まれた。詳細は割愛するが、当時は多くの人が完治してい

たこの症状に対し、いわゆる医療事故が原因で、10歳までに10回の手術を重ねるも結局完治には至らず、今日まで不自由を強いられている。

「この子は一生車椅子かも知れません」と医師から告げられた両親は、自宅で生涯の面倒を見られる仕事として、娘にピアノ教師の道を選んだ。年に1度のペースで手術・入院していたため、退院している間に近所のピアノ教室へ2歳から通い、幼稚園や保育園へは通えなかった。初めての「集団生活」は小学校から始まったため、さぞやわがままな生徒であったことだろうと、当時の担任教諭に申し訳なく思う。

「お前は他の子と違うのだから、勉強やピアノを頑張らなければいけない。」と、ことあるごとに両親から諭された。今なら「障害があつて不利であるから、人より余計に努力してやっと一人前」という親の意図がわかるのだが、足が悪いなりに可愛がられて育ったためか、子供時代の私は謎に自己評価が高く「他の子と違う」私ったら（良い意味で）トクベツ？」と大変ポジティブな解釈をしていた。そのおかげか、小・中学時代に結構ないじめにあった割にはグレもせず、恩師や友にも恵まれ、何とか音楽の道に進むことができた。

音楽療法士への道を目指したのは、ピアノ教室へ

富山 美由紀「3年9組」
ミュージック・コア・ミュージク主宰
日本音楽療法学会認定音楽療法士
学校法人身延山学園 身延山大学 文学芸術専攻 特任講師
学校法人帝京科学大学 帝京福祉専門学校 非常勤講師
国際ソロプチミスト山梨 会長



幼少期。両足にコルセットをつけて歩行器に乗っていた様子

きた生徒さんに精神疾患があると聞いた時だ。「私には病気を治すことはできないが、せめて、してはいけないことくらいは学ぼう」と、音楽の知識や経験が活かせる音楽療法研究所の門を叩いた。学ぶうちに、自分は、もっと重い障害のある方から比べれば健常者に近いが、では五体満足かと言われるとそれも違う。ちょうど健常者と障碍者の真ん中に位置する私にしかわかり得ない、双方の橋渡しになるようなアプローチができるのではないかと考えるようになった。

音楽教室には、杖を突いて通う高齢の方も多く、新設した教室は車椅子の方も来られるようスロープなどをつけた仕様にした。

定期的にピアノリサイタルを開催し、クラシック音楽にあまり馴染みのない方々にも楽しんでいただけるような、遊び心のあるトークコンサート形式をとっている。

音楽療法の現場では、対象者が自分の障害などを意識せず、残存能力で楽しめるプログラムを心がけている。また「音楽脳トレ®」という、認知症や介護予防に特化したプログラムを開発し、講演活動を行っている。更に、20年ほど前から女性の奉仕団体に所属し、女性に生まれ



リサイタル風景



たというだけで様々な被害や差別を受け、学習の機会さえ失われている女性と女兒の生活と地位向上のために支援を行っている。

それらの活動の軸になるのは「バリアフリー」。年齢や身体的障害だけでなく、偏見や差別、文化的な障壁など、努力ではどうにもできないデメリットを少しでも取り除きたいという思いで活動に取り組んでいる。

前述の通り、クラシック音楽やそのコンサートというのは馴染みのない方には、不要に格式ばった、肩の凝る印象があるようだ。だがそのクラシック音楽の作曲家たちも、令和に生きる我々と何ら変わらない恋愛や別離、争いや病氣などに悩まされ、翻弄されてきた。そしてその心の有り様を音楽に表した。文化や時代背景などをたどりながら、当時の人々の心に思いを馳せ、その音楽の持つメッセージを伝えていく義務が、我々音楽家にはあろうと考えている。

「継往開来」のテーマを頂いた時に真っ先に浮かんだのは「日々新た」であった。卒業してから今日に至るまで、常に「昨日よりも今日。今日よりも明日へ、新たな気持ちで一歩前に進もう」と考え続け



音楽脳トレ®講演会



音楽教室内観

て来られたのは、多感で好奇心に満ちた高校生活の三年間で「一高生魂」を刷り込まれたおかげだと、心から感謝している。